

「光を証言する人」

ヨハネによる福音書 1:6-13
イザヤ書 40:3-5

2025年12月7日
野村 友美 師

<私たちにとっての光>

クリスマスを待ち望むアドベントも、2週目に入りました。

今日は2本のキャンドルに火が灯っています。来週には3本、そして再来週のクリスマス礼拝の時には、4本全部に火が灯ります。

この世界に満ちている苦しみや悲しみ、そして私たち人間の罪がもたらす暗闇に、イエス・キリストの救いの光が広がっていく。そういう喜びと希望をあらわすものとして、アドベントのキャンドルの光はクリスマスに向かって増えていくんです。

さて、今日の聖書の言葉はイエス・キリストという「光」について、こう語っています。

「その光は、まことの光で、
世に来てすべての人を照らすのである。」

私たちが生きているこの世界には、いろんな光がありますよね。太陽の光、月や星の光、夜道を照らしてくれる街灯や、建物の中を照らす灯り、今の時期だとイルミネーションの光もきれいで。

光があるから、私たちは自分の周りに何があるって、今どんなところにいるのかを知ることができます。

もし光がなかったら、ただまっすぐに歩くことさえ難しいでしょう。おそるおそる、ゆっくりと一歩ずつ足を前に出せば、とりあえずは進めます。

でも本当にまっすぐ進んでいるかどうかを、自分で確かめることはできません。

誰にでもちょっとした体の歪みとかバランスのずれがあるって、そのせいでまっすぐ歩いているつもりでも少しずつ、進む方向が曲がってしまうんだそうです。

ですから真っ暗闇の中をすんすん歩けば、いつの間にか壁に突っ込んだり、誰かにぶつかってしまったり、階段から転げ落ちてしまうこともあるでしょう。

私も「家の中は慣れてるから大丈夫」と、夜に廊下の電気をつけないで歩いていたら、思いがけないところで壁にぶつかって、痛い思いをすることが時々あります。

光に照らされて、周りの状況を知って、自分の歪みやずれを少しずつ調整することで、私たちはまっすぐ進むことができるようになります。

同じように、私たちの心にも、また私たちの生き方にも、照らしてくれる光が必要なのかもしれません。

今、自分はどういう状況にいるのか。

どこを目指して、どういう方向に進んで行けばいいのか。照らしてくれる光がないと、私たちはそれが「まっすぐ」だと思い込んだ方向に突き進んでしまうでしょう。

壁に突っ込んで痛い思いをしたり、そこにあるものを蹴り倒したり、誰かにぶつかって傷つけながら、行きたかったのとは違う場所に向かって進み��けてしまう。

そんな危なっかしい私たち、すべての人を

照らすまことの光として、イエス・キリストは私たちの世界にやって来られた。

そうヨハネの福音書は、今日の言葉で告げ知らせているんです。

<バプテスマのヨハネ>

その前に、ヨハネはあるひとりの人を紹介します。その人の名前もこれまた「ヨハネ」。バプテスマのヨハネ、洗礼者ヨハネと呼ばれている人です。

彼は証しをするために来た、彼は光じゃなくて「光を証しする人」だと、福音書を書いた方のヨハネは繰り返し説明しています。

それは、イエス・キリストじゃなくてバプテスマのヨハネの方を「神様から遣わされた救い主だ」と主張する人たちがいたからです。

イエス様がこの地上で生きておられた時から、かなりたくさん的人が、バプテスマのヨハネこそ救い主だと信じていました。確かにバプテスマのヨハネは、生まれたときのエピソードも、本人の見た目や生き方も、明らかに普通の人とは違っています。

彼は独りで荒野に住んで、ラクダの毛皮を服にして、腰には革の帯を締めて、いなごと蜜を食べていたそうです。もし目の前に現れたら、ちょっとドキッとする感じの人ですよね。

ドキッとするだけじゃなくて、イスラエルの人たちにとって、このヨハネの姿はある預言者を連想させたようです。

その預言者の名前はエリヤ。バプテスマのヨハネが生まれるずっと前、ざっくり800年以上は昔のイスラエルで、エリヤは預言者として働いていました。彼は死なずに、生きたまま天に上げられた、という伝承があります。それで「終わりの日には、エリヤがメシアとして遣わされ

てくる」と、人々から信じられていたんです。毛皮を着て、革の帯をして、荒れ野に住んでいる。バプテスマのヨハネの姿はまさに、旧約聖書に登場するエリヤの姿そのままでした。エリヤを連想させる姿をしたヨハネが、「さあ、罪を悔い改めて、救い主を待ちなさい！」と強い言葉で人々に呼びかけたんです。このことに衝撃を受けた人たちが、次々にヨハネのところに集まってきて、自分の罪を告白してヨルダン川で洗礼を受け、ヨハネの弟子になっていきました。

そんなバプテスマのヨハネの見た目と行動は、当時の人たちからすれば、イエス様よりもずっと救い主として受け入れやすかつたのかもしれません。

もちろんバプテスマのヨハネも、救い主でこそありませんでしたが、特別な役目のために神様から選ばれて、神様のために働いた人でした。旧約聖書の預言者イザヤが、彼についてこう預言しています。

「呼びかける声がある。

主のために、荒れ野に道を備え、
わたしたちの神のために、
荒れ地に広い道を通せ。
谷はすべて身を起こし、
山と丘は身を低くせよ。
険しい道は平らに、
狭い道は広い谷となれ。
主の栄光がこうして現れるのを、
肉なる者は共に見る。
主の口がこう宣言される。」

(イザヤ40:3-5)

バプテスマのヨハネのお父さんは、エルサレム神殿の祭司だったザカリヤという人でした。お母さんのエリサベトは、旧約聖書の出エジプト記に登場するモーセのお兄さん、アロンの子孫で、イエス様のお母さんになったマリアの親戚でもあります。

ザカリヤとエリサベトには、結婚してからずっと子どもが生まれなくて、二人とももう子どもを生むのは諦めるぐらいに年齢を重ねていました。ですがある日、ザカリヤは神殿で天使からこう告げられます。

あなたたちに男の子が生まれる。

その子は、救い主のために準備をする人になる。「いやいや、まさかそんなことが」と、びっくりして信じられなかったザカリヤは、子どもが生まれてくるまで口がきけないようにされました。

やがて天使のお告げどおりに、エリサベトはのちにバプテスマのヨハネになる赤ちゃんを生みました。そして口がきけるようになったザカリヤは、聖霊に満たされてこう歌った、とルカによる福音書が伝えています。

「幼子よ、
お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。
主に先立って行き、その道を整え、
主の民に罪の赦しによる
救いを知らせるからである。」

(ルカ1:76-77)

イザヤが預言して、天使が告げ知らせて、ザカリヤが歌ったとおり、バプテスマのヨハネは、イエス・キリストを迎える準備をする人になりました。

イスラエルの人たちがずっと待ち望んできた

メシア、救い主とは、いったいどういうお方なのか。神様は何のために、救い主を遣わされるのか。

その本当の意味を伝えて、人々が救いの光に照らされることを心から喜べるように、準備した人。それがバプテスマのヨハネだ、と今日の聖書の言葉は伝えているんです。

わざわざ伝えて念押ししないといけなかつたぐらい、救い主のイメージに近いヨハネを自分たちの「光」にしたがる人が多かったということでしょう。

それは、当時のイスラエルの人たちだけに限ったことではありません。私たち人間はみんな、自分を照らして導いてくれる光を探し求めるものです。

あの人の言葉が気に入ったから、あれを私の光にしよう。この心理学は納得できる、これが私の光だ。あの占いについて行こうか、それともこの哲学に従おうか。それぞれ自分が思う「まっすぐ」に合わせて、自分の光をあれこれ選びたがって、でも満足しきれなくて迷子になる。そんな私たちを照らして、神様の愛と正しさで導くまことの光こそイエス・キリストだ、とヨハネによる福音書は宣言しているんです。

<光を証言する人>

その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

このヨハネの福音書の言葉を、書かれた元々の言葉であるギリシャ語で見てみると、ちょっと素敵なことがあります。

「すべての人」という言葉の「人」の部分が、複数形じゃなくて単数形で書かれています。つまり「すべての人」とは「一人ひとり、すべ

ての人」だと、福音書は言っているんです。

私たちの罪の暗闇を照らし出して、本当の「まっすぐ」を見せてくれる光。神様の愛と正しさで、私たちが本当にたどり着きたい場所を照らしてくれる光。

迷子の私たちを救い出して導くイエス様の光は、遠い空の上からみんなまとめてバーンと照らすような光ではありません。

一人一人を、誰も分け隔てしないでひとり残らず、すべての人を一人ずつ照らし出す光だと、福音書を書いたヨハネは言っているんです。

どこかに隠れれば逃げられるような光じゃないんです。私たち一人一人が抱える暗闇に、イエス様はちゃんと一人ずつ向き合って、神様の愛の光で私たちを隅々まで照らすお方です。

すべての人を照らすために。

私たち一人一人を照らすために。

神様の独り子は、私たちと同じ一人の人間にあって、私たちの世界にやって来てくださいました。

このイエス・キリストの光に照らされて、神様からの愛を受け入れなさい。イエス・キリストの光の中で、神様が示される正しい方向へ歩いていきなさい。 そう呼びかけるために、バプテスマのヨハネも、福音書を書いたヨハネも、

「光を証言する人」として神様から遣わされました。

そしてヨハネたちは、この光を証言する務めを、あの私たちにも手渡そうとしています。すべての人を照らす「光」、この世界にやってきた神様の「言」。 イエス・キリストは、ご自分を受け入れた人、イエス様を救い主と信じる人々に、神の子となる資格を与えた。 そうヨハネの福音書は、今日の言葉で告げ知らせています。

イエス・キリストを通してあらわされた、神様

からの愛と救いを受け取るなら。イエス・キリストの言葉と行動に照らされて、自分の歪みやすれに気づかされて、まっすぐに神様に従っていこうとするなら。

誰もが新しい命を与えられて生きる「神の子」、神様の愛と救いを生きて証言する人だと、今日の聖書の言葉は私たちに語りかけています。

アドベントのキャンドルが一本ずつ灯って、光が増えて広がっていくように。

ここにいる私たち一人ひとりが、イエス・キリストという光を受け取って、この光に照らされて生きるときに、一人ひとりが「光を証言する人」なんです。

光は暗闇の中で輝いている。

ヨハネの福音書が掲げたこの証言に送り出されて、私たちも光を証言する人として、それぞれの日常へと遣わされていきましょう。

私たち一人一人の暗闇を、そしてこの世のすべての場所にある暗闇を、イエス・キリストの救いの光が照らしてくださるように。

どこでどう生きているどんな人でも、一人残らず、すべての人を愛しておられる神様の思いとやり方に従って、まっすぐ歩いて行けますように。

すべての人の苦しみに、悲しみに、傷に、叫びに、神様の愛が灯されますように。

導きの光を祈り求めながら、今日もご一緒に歩き出していきましょう。

お祈りいたします。